

自己を見つめ、よりよい生き方について 考える中学校道徳科の授業展開

— 生徒が問題意識を持つための導入の工夫を通して —

長期研修員 土屋 真美

《研究の概要》

本研究は、生徒が問題意識を持つための導入の工夫を通して、自己を見つめ、よりよい生き方について考える生徒の育成を目指したものである。具体的には、道徳科の授業において、生徒が問題意識を持って道徳的諸価値を自分との関わりで見つめ、「解決したい」という思いから主体的に考えることができるように導入を工夫し、問題意識を重視した授業を展開したことが、自己を見つめ、よりよい生き方について考える生徒の育成につながることの有効性について、実践を通して明らかにした。

キーワード 【道徳 自己を見つめる よりよい生き方 問題意識 導入の工夫】

群馬県総合教育センター

分類記号：G10-01 平成29年度 263集

I 主題設定の理由

文部科学省では、平成27年3月27日に学校教育法施行規則を改正し、これまでの「道徳の時間」を「特別の教科である道徳」（以下「道徳科」という。）として新たに位置付けた。中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（平成29年7月）には、道徳教育の質的転換を図るため、「発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う『考える道徳』『議論する道徳』」として、目指すべき方向が示されている。また、第2章第2節道徳科の目標に、道徳的価値の理解について「思春期にかかる中学生の発達の段階においては、ふだんの生活においては分かっていると信じて疑わない様々な道徳的価値について、学校や家庭、地域社会における様々な体験、道徳科における教材との出会いやそれに基づく他者との対話などを手掛かりとして自己との関わりを問い直すことによって、そこから本当の理解が始まるのである。」と示している。

群馬県においては、平成29年度学校教育の指針（解説）で、指導の重点の一つとして「他者の多様な考え方や感じ方に触れ、自己を深く見つめる学習を工夫し、これからの生き方への思いや願いを深めていけるようにする。」を挙げている。そこで、一人一人の生徒に自分の生活経験やそれに伴う考え方や感じ方を想起させ、自分事として捉えさせることが大切となる。また、ねらいとする道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として深く考えさせることが大切である。

所属校生徒への道徳科に関するアンケート調査結果から、「自分にとって大切だと思う」との設問に「そう思う・どちらかといえばそう思う」と答えた生徒の割合が93%、「授業で学んだことは、自分の将来役に立つと思う」の設問では93%であり、「道徳科の授業」の重要性を感じている生徒が多いことが分かった。一方で、「今までの自分の経験を振り返って考えることがある」と答えた生徒は75%であり、道徳的価値を自分の生活経験と結び付け、自分事として捉えきれていないという課題がある。また、「自分の考え方や行動の良いところに気付くことがある」が74%、「自分の考え方や行動の課題に気付くことがある」が79%であり、自分自身の問題として考えることが不十分なため、自分の考えのよさや課題への気付きにまで至っていないという課題もあった。

これらのことから、道徳科の授業において、生徒が問題意識を持って道徳的諸価値を自分との関わりで見つめ、「解決したい」という思いから主体的に考えることができるように導入を工夫し、問題意識を重視した授業を展開する。そのことで、生徒は自己を見つめ、よりよい生き方について考えることができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

中学校道徳科の授業において、自己を見つめ、人間としてのよりよい生き方について考える生徒を育成するため、生徒が問題意識を持つことのできる導入を工夫し、問題意識を重視した授業展開を構想・実践することの有効性を明らかにする。

III 研究仮説（研究の見通し）

1 問題意識を持つための導入の工夫について

導入において、自分の生活経験や資料の問題場面と既存の道徳的価値を比べることで、生徒は問題意識を持ち、問題の解決に向け自分事として主体的に取り組むことができるであろう。

2 問題意識を重視した授業展開について

問題意識を持って、道徳的価値の理解を深め、問題の解決策を考え、吟味する授業を展開することで、生徒は自己を見つめ、よりよい生き方について考えることができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「自己を見つめる」とは

道徳的価値をこれまでの自分の生活経験やその時の考え方・感じ方と照らし合わせながら、自分のこととして捉え、考えることである。

(2) 「よりよい生き方について考える」とは

生徒にとって、人としてのよさや自己の生き方について多様な価値観の存在を認識しつつ、自己や社会の未来に夢や希望を持って、より良い方向を探していくことが重要である。本研究では、道徳科の授業において、道徳的価値の理解を深め、道徳上の問題について生徒が自分なりに納得できる答えを見だし、自分の考えのよさや課題に気づき、これからの目標を見付け、道徳的価値を実現しようとする事である。

(3) 「問題意識」とは

学習指導要領解説では、「問題や課題は、多くの場合、道徳的な判断や心情、意欲に誤りがあったり、複数の道徳的価値が衝突したりするために生じるものである」としている。本研究では、生徒が想起した自分の生活経験や資料の中の問題場面と生徒自身が持っている道徳的価値との間に生じるズレに気付くことである。

2 授業展開について

生徒が問題意識を持ち、よりよい生き方について考えるために、以下の授業を展開する。本研究の研究構想図は、図1のとおりである。



図1 研究構想図

(1) 問題を見付ける

導入において、自分の生活経験や資料の問題場面と既存の道徳的価値を比べることでズレに気づき、問題意識を持つ。そして、問題が解決した場合と解決しない場合の状況を考えることで切実感が高まり、「解決したい」との思いから主体的に考えることができる。ここでは、「生活経験からの導入」と「資料からの導入」について、それぞれ発問を工夫することで問題意識を持てるように

する。なお、二つの導入のいずれを選択するかについては3に記述する。

(2) 道徳的価値の理解を深める

展開前段において、問題の解決に結び付く道徳的価値の理解を深める。ここでは、問題の解決に結び付く発問を工夫し、資料の中の登場人物の行為や判断、心情の変化やその理由を考える。初めに個人の考えを持ち、その後全体で考えを比べたり、整理したりしながら多様な考えを引き出す。その時、生徒は自分の問題意識を持ちつつ、主人公と自分を照らし合わせたり、比べたりしながら考えを深める。

(3) 解決策を考え、吟味する

展開後段において、問題の解決を図る発問を工夫し、深まった道徳的価値の理解を基に問題に対する自分の解決策とその理由を考える。まず個人で考えてワークシートに記述し、その後ペアや小グループで考えを伝え合い、お互いの考えのよさを交流することによって解決策を吟味する。さらに終末において、授業を振り返り、初めと今の自分の考えを比べて自己の成長を実感する。これらを通し、生徒は問題に対する自分なりの納得できる答えを見だし、これからの目標を見付け、よりよい生き方について考える。

このような授業展開を通して、生徒が問題意識を持ちつつ自分との関わりで問題を解決していくことで、自己を見つめ、よりよい生き方を考えることができる。

3 生徒が問題意識を持つための導入の工夫について

従来の指導では導入で生徒の生活経験を問い、価値の方向付けを行うことが多い。本研究では、生徒が問題意識を持つことに重点をおいた導入とする。具体的には、自分の生活経験や資料の中の問題場面と生徒が既成している道徳的価値を比べることでズレに気付き、問題意識を持つ。そして、より良い生活のために問題を「解決したい」という切実感を高めることで、生徒が自分事として主体的に考えることを目指すものである。

また、生活経験や資料の内容によって、「生活経験からの導入」と「資料からの導入」が考えられる。以下に二つの導入について示す。

(1) 生活経験からの導入

主題や資料の内容が生徒の生活経験と密接であり、生徒が生活経験を想起しやすい場合には、「生活経験からの導入」が適している。「生活経験からの導入」の流れを図2に示す。

生徒が生活経験を基に問題意識を持つことは、自分との関わりで道徳的価値を考えるために大切である。しかし、生徒の生活経験は各々異なることが多い。そこで、価値のよさや大切さなどの価値理解、分かっているけれどもできないなどの人間理解である道徳的価値と比べて一度自らの生活経験を見直す。このことで、できていない、分かっているなどのズレに気付き、問題意識を持つことができる。さらに、その問題が解決した場合、解決しない場合の状況を考えることで切実感が高まり、「解決したい」という思いから主体的に考えることができる。

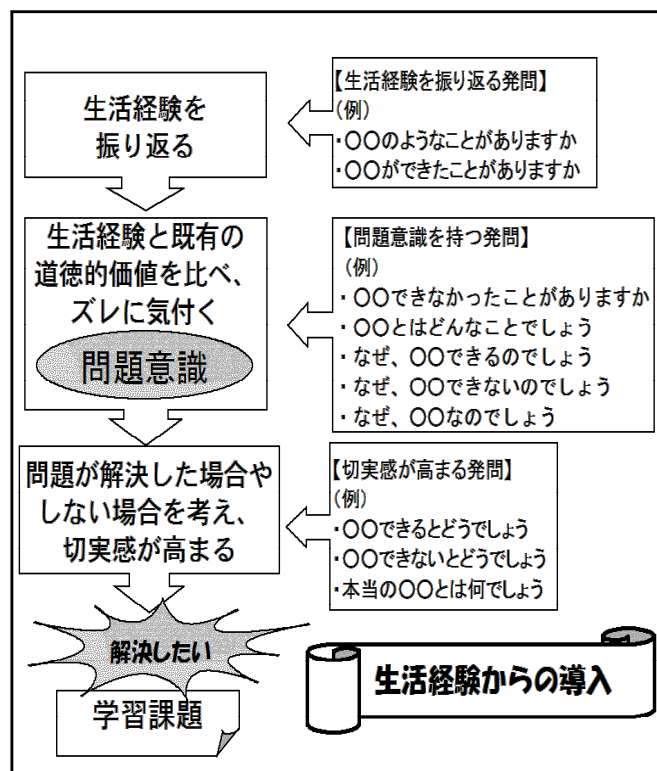


図2 「生活経験からの導入」の流れ

(2) 資料からの導入

主題や資料の内容が生徒の生活経験からかけ離れており、生徒に実感させづらい場合や、生徒が本音を語りづらくなるようなマイナスの要素が強い問題場面の場合は、「資料からの導入」が適している。「資料からの導入」の流れを図3に示す。

主人公の道徳的な問題場面を生徒自ら見付け、それを全員で確認したり整理したりして共有することが、自分との関わりで道徳的価値を考えるために大切である。そこで、主人公の道徳的な問題場面と価値のよさや大切さなどの価値理解、分かっているけれどもできないなどの人間理解である道徳的価値とを比べる。その際、主人公と同じような場面が自分にもあるのかを考え、主人公に自我関与できるようにする。このことで、できていない、分かっているなどのズレに気付き、問題意識を持つことができる。さらに、その問題が解決した場合、解決しない場合の状況を考えることで切実感が高まり、「解決したい」という思いから主体的に考えることができる。

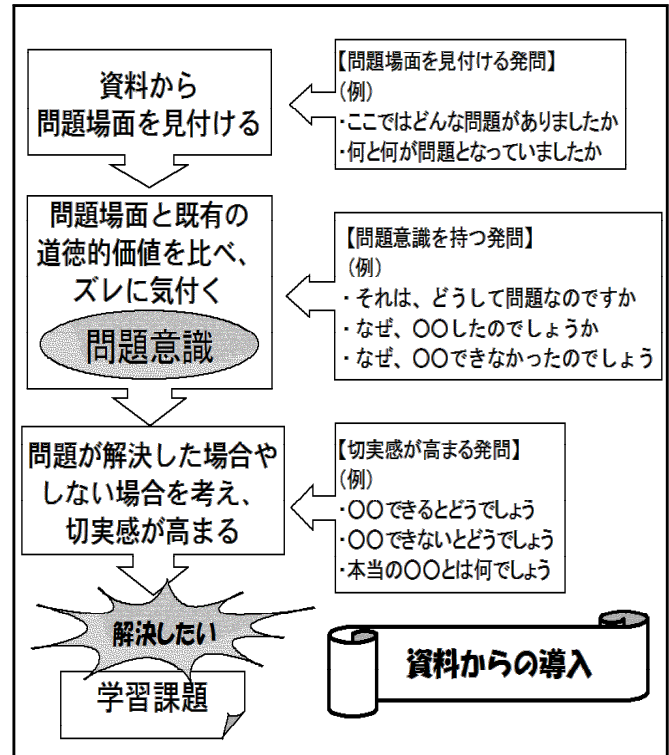


図3 「資料からの導入」の流れ

解決しない場合の状況を考えることで切実感が高まり、「解決したい」という思いから主体的に考えることができる。

V 実践の計画と方法

1 授業実践の概要

対象	所属校 第1学年 163名	
実践期間	平成29年8月30日～11月15日 20時間（4時間×5クラス）	
	学習内容	研究上の手立て
第1時	<p>○主題名「挨拶の大切さ」 B-（7）礼儀</p> <p>○資料名「山での出会い」（出典：かけがえのないきみだから 中学校1年 学研）</p> <p>○ねらい 挨拶をしたときのよさやその結果を考えるを通して、挨拶の意義を理解し、相手や周りの人の気持ちを考え、時と場に応じた挨拶をしようとする態度を養う。</p> <p>*生活経験からの導入</p>	道徳科の授業において、生徒が問題意識を持つための導入を工夫し、問題意識を重視した授業展開を構想・実践する。
第2時	<p>○主題名「社会の中で守るべき正義」 C-（10）遵法精神、公德心</p> <p>○資料名「傘の下」（出典：かけがえのないきみだから 中学校1年 学研）</p> <p>○ねらい きまりを守れなかったときの主人公の気持ちを考えるを通して、社会の中で守るべき正義としての法やきまりを大切に、秩序と規律ある社会を実現しようとする判断力を養う。</p> <p>*資料からの導入</p>	
第3時	<p>○主題名「集団の一員としての自覚と誇り」 C-（15）よりよい学校生活、集団生活の充実</p> <p>○資料名「一枚のピース」（出典：かけがえのないきみだから 中学校1年 学研）</p> <p>○ねらい 部活動での一人一人の役割について主人公の気持ちの変化を考えるを通して、集団における自己の立場や役割と責任を自覚し、成員としての誇りを持って、進んで集団生活の向上に努めようとする態度を養う。</p> <p>*生活経験からの導入</p>	

第4時	○主題名「自分の中にある弱さと強さ」D- (22) よりよく生きる喜び
	○資料名「つかの間の出来事」(出典：かけがえのないきみだから 中学校1年 学研)
	○ねらい 心の誘惑に負けて正しい行動ができなかった主人公の気持ちの変化を考えることを通して、人間には弱さもあるがそれを乗り越える強さもあることを信じ、人間としての誇りを持って生きようとする心情を養う。
	*資料からの導入

2 検証計画

検証の観点	検証の方法
導入において、自分の生活経験や資料の問題場面と既存の道徳的価値を比べたことは、生徒が問題意識を持ち、問題の解決に向け自分事として主体的に取り組む上で有効であったか。	・ワークシートの分析 ・実践前後の生徒アンケートの分析
問題意識を持って、道徳的価値の理解を深め、問題の解決策を考え、吟味する授業を展開したことは、生徒が自己を見つめ、よりよい生き方について考える上で有効であったか。	・生徒の発言の分析 ・記録ビデオの分析 ・教師の意見

VI 研究の結果と考察

自己を見つめ、よりよい生き方について考えるために、生徒が問題意識を持つための導入を工夫し、問題意識を重視した授業を展開したことの有効性を検証した。授業実践の結果と考察は以下のとおりである。

ここでは、第1時の「山での出会い」と第4時の「つかの間の出来事」について報告をする。

1 第1時「山での出会い」の実践

小学4年生の弟と父と一緒に山登りに出かけた主人公は、挨拶をしてきた若い夫婦に挨拶を返すことができなかった。しかし、積極的に挨拶をしていた弟に対し3人の女子大生が挨拶をしなかったことで弟や主人公は無視されたと感じる。主人公は、自分もその女子大生と同じかもしれないということに気付き、挨拶についての考えを膨らませていく。

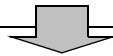
主人公の挨拶に対する考え方の変化に着目し、「目に見えないプラスの効果」をキーワードに挨拶の意義を生徒一人一人に主体的に考えさせることで、相手の気持ちを考えて時と場に応じた適切な言動を取ろうとする態度を育む資料である。

(1) 問題意識を持つための導入の工夫について（生活経験からの導入）

本授業は挨拶という生徒にとって身近な主題であり、個々の生活経験を想起することが有効であると考え、「生活経験からの導入」を行った。「生活経験からの導入」の流れを表1に示す。

表1 「生活経験からの導入」の流れ

	教師の発問	生徒の反応
生活経験を振り返る	○どのようなときに挨拶をしていますか。	・学校の廊下ですれ違った人になっている。 ・旗振りをしてくれる地域の人になっている。
問題意識を持つ	○挨拶ができなかった場面がありますか。	・入学したての頃は恥ずかしくてできなかった。 ・友達とのおしゃべりに夢中で、すれ違った人にならなかった。 ・大勢のとき誰かがしてくれるだろうと思ってできなかった。
	○なぜ、挨拶をするのでしょうか。	・挨拶は大切だからしている。 ・コミュニケーションをとるためにしている。

		<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶するように言われているから。 ・何となくしている。
 切実感が 高まる	○挨拶ができない場面が増え るとどうですか。	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちが暗くなる。 ・話しかけづらくなる。 ・生活しづらくなる。

最初に、日常生活で挨拶をする場面を振り返った。そのときに挨拶運動の写真を提示し、挨拶の場面を振り返りやすいようにした。多くの生徒は学校での挨拶の場面を思い出していたが、家庭や地域での様子を挙げた生徒もいた。

次に、問題意識を持つために挨拶ができない場面を振り返った。すると、各自が自分の生活経験に基づいた場面を挙げた。さらに、挨拶の意義を問い掛けると、生徒からは挨拶に対する一般的な意見と消極的な意見が出された。このように、生徒は生活経験と既有的道徳的価値を比べて、自分の生活経験を見直すことができた。その結果、挨拶をすることは大切だと分かっているが、挨拶の意義については理解が十分ではなく、実際には挨拶ができないときもあるという問題意識を持つことができた。

さらに、挨拶ができた場合やできない場合の状況を考えることで、挨拶の意義を考えて挨拶できる生活にしたいという切実感が高まり、この問題を「解決したい」という思いから自分事として主体的に考えることができた。

(2) 問題意識を重視した授業展開について

導入で持った問題意識を基に、道徳的価値の理解を深める場面では挨拶の意義についての考えを深めた。ここでは資料「山での出会い」を読み、主人公の挨拶に対する考えの変化を基に問題の解決に結び付く発問「挨拶をすることで、目に見えないどんなプラスの効果が生まれるか」について考えた。最初に個人の考えをワークシートに書き、全体での話し合いでは意図的指名によって多様な考えを出し合い、自分の考えと比べたり、似ている考えをまとめたりしながら理解を深めた。ここでは、挨拶によって自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを変えたりできることに気付いた考えが出された。また、挨拶が周囲に与える影響についても考えを深めた。時と場に応じた挨拶の意義を考えることで、問題の解決に結び付く道徳的価値の理解を深めることができた。

解決策を考え、吟味する場面では、深まった道徳的価値の理解を基に問題の解決を図る発問「これからどのような気持ちで挨拶をしていきたいか」を考えさせた。ここでは、初めに想起した挨拶の場面を振り返ることで、自分との関わりで考えられるようにした。まずは自分の考えをワークシートに記入した後、小グループで自分の考えを伝え合い、挨拶の場面や相手を設定して役割演技をした。このことで、挨拶をするときの心構えや挨拶されたときのよさを実感することができた。また、時と場に応じた挨拶の仕方を考え、実感を伴って道徳的価値を捉えることができた。その後、お互いの考えのよさを交流しながら、解決策を吟味した。さらに、初めの自分の考えと最後の考えを比べ、どのように変わった（変わらなかった）のか、どの場面が変わったのか、なぜ変わった（変わらなかった）のかなどを振り返ることで、自分の考えの深まりを実感した。これらのことで生徒は挨拶の意義を考え、時と場に応じた行動をしていこうなどの納得できる答えを見だし、これからの目標につなげることができた。

2 第4時「つかの間の出来事」の実践

主人公は、買い物に行った先でふと手に取った本の表紙を誤って破いてしまう。悪いことをしてしまったという気持ちとは裏腹に誰も見ていないのだから知らないふりをして帰ろうというずるい気持ちが湧いてくる。一度は黙って店の外に出たが、帰り道に後悔する気持ちが強くなり、再び店に戻って謝る。その後、母にも正直に告白することができ、心の中のもやもやしたものがなくなっていく。

主人公が自分の弱さを克服しようとするときの心理描写を通して、人間誰も弱い心があるが、それを克服する強さや気高さもあることに気付き、人間として誇りある生き方に近づいていこうとする心を育む資料である。

(1) 問題意識を持つための導入の工夫について（資料からの導入）

本授業では、主人公のように自分の心の弱さから間違っただけの行動を取ってしまうことは多くの生徒が経験していると考えた。しかし、間違っただけの行動を取ってしまった経験のようにマイナスの要素の強い経験の想起は、生徒が本音を出しづらく、建前を語ることにつながると考え、「資料からの導入」を行った。「資料からの導入」の流れを表2に示す。

表2 「資料からの導入」の流れ

	教師の発問	生徒の反応
問題場面を見付ける	○資料の中でどのような問題がありましたか。	・本を破ったのに黙っていた。 ・すぐに謝らなかった。
↓		
問題意識を持つ	○主人公はなぜすぐに言わなかったのでしょうか。	・怒られたくないから。 ・黙っていれば見つからないから。 ・悪魔のささやきに負けてしまったから。
↓		
切実感が高まる	○このような場面があるとどうですか。	・自分にもありそうだ。 ・このままでは良くない。 ・誘惑に負けないように考えた方がよい。

最初に、資料から問題場面を見付けた。資料を読む前に道徳的な問題場面を見付けながら聞くように伝え、範読後、問題場面をワークシートに記入させた。そして、生徒が見付けた問題場面を集約し、全体で共有した。

次に、「主人公は言わなくてよいと思っていたのか」と聞き、主人公は言った方がよいという気持ちがあったが、実際には言えなかったことを確認した。さらに、主人公が正直に言うことができなかつた理由を問い掛けると、主人公が心の弱さに負けたことに気付いた意見が出された。このように生徒は、資料の問題場面と既存の道徳的価値を比べて、心の誘惑に負けてしまつて正しいと思う行動が取れないときがあるという問題意識を持つことができた。

さらに、問題が解決した場合や解決しない場合の状況を考えることで、自分にもありそうな問題場面について誘惑に負けずに行動できるようにしたいという切実感が高まり、この問題を「解決したい」という思いから自分事として主体的に考えることができた。

(2) 問題意識を重視した授業展開について

導入で持った問題意識を基に、道徳的価値の理解を深める場面では、知らないふりをしようという主人公の弱い気持ちが、迷いながらも正直に言おうという気持ちに変化した理由を考え、問題の解決に結び付く道徳的価値の理解を深めた。ここでは、誘惑に負けて行動すると気持ちがすっきりせず、ずっと後悔してしまうということに気付いた意見が出された。また、全体で話し合う中で、店員や次に本を買う人や母親など、周囲の人に対して後ろめたい気持ちになることも共有できた。そして、本屋で迷いながらも勇気を持って店員さんに声を掛けた主人公の気持ちを基に、人間には弱さもあるがそれを乗り越える強さもあることに気付き、問題の解決に結び付く道徳的価値の理解を深めることができた。

解決策を考え、吟味する場面では、深まった道徳的価値の理解を基に問題の解決を図る発問「これから、どうすれば誘惑に負けずに行動することができるか」を、自分との関わりで考えた。ここで各自の経験を振り返ることによって、導入で自分の経験が十分に想起できなかった生徒も再度自分の経験と照らし合わせ、問題を自分との関わりで考えやすくなった。自分の考えをワークシートに記入した後、小グループで自分の考えを伝え合い、お互いの考えのよさを交流しながら解決策を吟味した。さらに、初めの自分の考えと最後の考えを比べ、どのように変わった（変わらなかった）のか、どの場面が変わったのか、なぜ変わった（変わらなかった）のかなどを振り返ることで、自分の考えの深まりを実感した。これらのことで、生徒は後悔しないように自分と向き合い、考えて行動していこうなどの納得できる答えを見だし、これからの目標につながることもできた。

3 「生徒が問題意識を持つための導入の工夫」の有効性について

生徒が問題意識を持つための導入を工夫したことの有効性を検討するため、授業実践後に「授業に関するアンケート（以後、授業アンケート）」を行った。第1時と第3時の授業アンケートの結果を「生活経験からの導入」、第2時と第4時の授業アンケートの結果を「資料からの導入」として以下に示す。

授業アンケート（図4）で、「授業の初めに『解決したい』『解決しなければ』と思う問題に気付くことがあったか」との質問に、「生活経験からの導入」で平均約80%、「資料からの導入」で平均約91%の生徒が肯定的な回答をした。このことから、導入を工夫したことが生徒に問題意識を持たせるために有効であったと言える。特に、「資料からの導入」は生徒に問題意識を持たせるために有効であった。

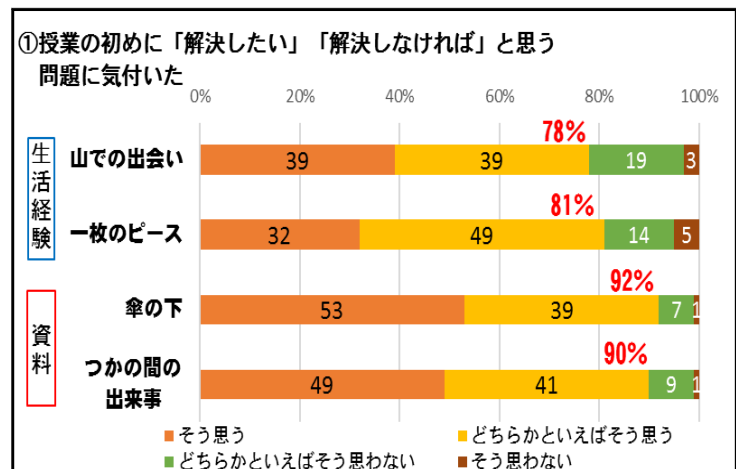


図4 「問題意識を持つこと」に関する授業アンケート結果

一方、「生活経験からの導入」では約20%の生徒は授業の初めに問題に気付くことができず、切実感を持つことができなかった。その理由として、個々の生活経験の差によって二つの理由が考えられた。一つは「道徳的価値の理解や実践意欲が高く、価値を実現できていると考えているため解決したいという切実感が低いこと」であった。このような生徒は、その後の授業展開で設定した学習課題（めあて）を意識しながら道徳的価値について考えを深めることができた。振り返りでは、初めは、今までできていたから同じで良いと思っていた気持ちだが、学習を深めることで更に良くしていこうという気持ちに変わったことを実感し、今後の自分の課題につなげていた。もう一つの理由は「道徳的価値の捉えが不十分であり、生活経験から問題意識を持っていないこと」であった。このような生徒は、挨拶をすることがあまり得意ではなく、問題把握も十分ではなかったが、めあてを意識して学習に取り組むことができた。そして、友達の考えを聞くことで道徳的価値の理解が深まった。振り返りでは、自分の生活に生かしてより良くしていこうという記述が見られ、授業のめあてが達成できたと答えている。このように、導入で十分に問題意識を感じていない生徒も問題意識を重視した授業を展開していくことで、徐々に問題を自分事として捉え、実感を持った自分なりの納得できる答えを見いだしていけることが分かった。

4 「生徒の問題意識を重視した授業展開」の有効性について

(1) 授業アンケートによる考察

授業アンケート（図5）から、「授業のめあてを意識しながら、考えることができたか」との質問に「生活経験からの導入」で平均約97%、「資料からの導入」でも平均約97%の生徒が肯定的な回答をした。ここでのめあては導入で持った問題意識を基に設定したものである。ほとんどの生徒がめあてを意識しながら道徳的価値の理解を深め、解決策を考えることができたことと実感していることは、問題意識を重視した授業展開が有効であったと言える。

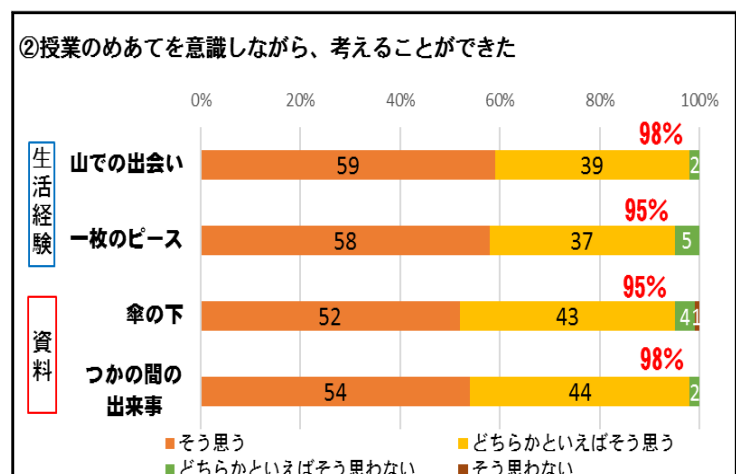


図5 「問題意識を重視した授業展開」に関する授業アンケート結果

導入で問題意識を持ち、問題意識を重視した授業展開を通して自分の考えを深めている生徒の様子が分かるワークシートの記述を図6に示す。

「山での出会い」(生活経験からの導入)		
	生徒A	生徒B
生活経験	相手が自分に気付いていないときには挨拶ができない。相手が気付いていないならいいかなと思ってしまうから。	人がたくさんいるとき、自分だけ大きな声を出せないと思うことがある。
解決策	今までは教室に入ってきて何も言わなかったけれど、これからは積極的に挨拶したいと思った。そうすれば、教室全体の雰囲気が良くなるし、みんなの気分も良くなると思う。また、挨拶をする人としらない人で区別せずに全員に挨拶をしたい。	自分も相手も良い気持ちになれるようにしたい。元気よく、笑顔で、相手の目を見て挨拶をしたい。 挨拶をした側もされた側も気持ち良くなることが分かった。
振り返り	最初は面倒だと思っていたけれど、挨拶をすることでとても気分が良くなるので、これからは積極的にしたい。	授業前、挨拶は言われているからやっているものだったけれど、今は気持ちが良くなるからやっているものだと思う。
「つかの間の出来事」(資料からの導入)		
	生徒C	生徒D
問題場面	売り物の本を破いてしまい、そのことを謝らなかつたこと。	本を破いてしまったのにすぐに言わず、知らないふりをして放っておいてしまったこと。
解決策	自分が取るべき行動は何かをしっかりと考えたい。弱い自分と向き合って、その弱い自分に打ち勝つようにする。自分のことだけを考えず、周りの人のことも考えるようにしたい。	自分も似たような経験があったが、資料の話と同じで謝ることができた。だから、その場で感じる罪悪感などが分かる。その場ですぐに言い、すっきりした気持ちで生活できるようにしたい。
振り返り	悪いことをしたら正直に言おうと改めて思った。自分の意志をしっかりと持って、これから後悔しないよう行動したいと思った。	最初は自分も少しぐらい大丈夫だという弱い気持ちがあったけれど、やはりやってはいけないことは罪悪感が残るので、良くないと思った。

図6 生徒のワークシートの記述

生徒Aは、自分の生活経験を見直して、問題意識を持つことができた。また、挨拶が周りの雰囲気を良くするという道徳的価値の理解を深めたことで解決策に結び付けた。さらに解決策を吟味する中で、誰に対しても同じ態度で接することを追記していた。

生徒Bは、初めは挨拶に対して消極的な考えを持っており、挨拶の意義を問うことで問題意識を持つことができた。振り返りでは、挨拶に対する自分なりの考えの変化を記述している。

生徒Cは、初めに資料を読んで問題場面をワークシートに記述した。主人公が何度も迷いながら正直に言えたことを基に道徳的価値の理解を深め、解決策に結び付けた。振り返りでは、これからの目標を持つことができた。

生徒Dは、事前のアンケートにおいて道徳科の授業で自分の経験を振り返って考えることが少ないと答えていた。しかし、「資料からの導入」で自分にも主人公と似た経験があると考え、そのときの気持ちを思い出しながら問題を自分事として捉え、解決策を考えることができた。振り返りでは、初めに持った問題意識が授業を通して変わったことに気付いている。

(2) 道徳アンケートによる考察

授業実践前の6月と授業実践後の11月に「道徳科に関するアンケート（以後、道徳アンケート）」を行った。各質問項目について、全体を100%で提示し、授業実践前後で「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と肯定的に回答した生徒の割合の変容について分析した。

道徳アンケート（図7）の結果から「①今までの自分の経験を振り返って考えることがある」で92%の生徒が肯定的な回答をし、17%の伸びが見られた。このことから、「生活経験からの導入」では生徒が想起しやすい生活場面から問題意識を持ったことで、自分事として考えることができたと思われる。一方、「つかの間の出来事」のようなマイナス要素が強い経験を想起させる資料でも、「資料からの導入」により自分の経験と照らし合わせながら、自分のこととして考えることができたと言える。

また、「②自分の考え方や行動の良いところに気付くことがある」では5%の伸び、「③自分の考え方や行動の課題に気付くことがある」でも8%の伸びが見られた。このことから、導入で問題意識を持ち、自分との関わりで道徳的価値を理解し、問題に対する自分の解決策を考え、吟味したことで、生徒が自分の考えや行動のよさや課題に気付くことが多くなったと考えられる。

一方、全体的には肯定的な意見が多かったものの、自分のよさや課題に気付いていない生徒も20%程度いる。生徒の授業の様子やワークシートの分析から、友達との交流を通して、自分の考えに強化や追加をしている生徒は非常に多く見られた。しかし、このことが自分の考えのよさや課題につながると捉えきれていない生徒が多い。授業中の自分の考えの深まりを実感し、その後のよりよい生き方についての考えにつなげていくためには、全体やペア・小グループでの考えの交流や振り返りの充実が求められる。

また、「④授業で気付いたことを、これからの生活に生かしていきたいと思うことがある」との質問に96%の生徒が肯定的な回答をし、7%の伸びが見られた。このことは、生徒が問題意識を持ちつつ自分との関わりで考えを深め、これからの生き方に目標を持つことのできた姿を表しており、本研究の主題である自己を見つめ、よりよい生き方について考えることができたと考えられる。

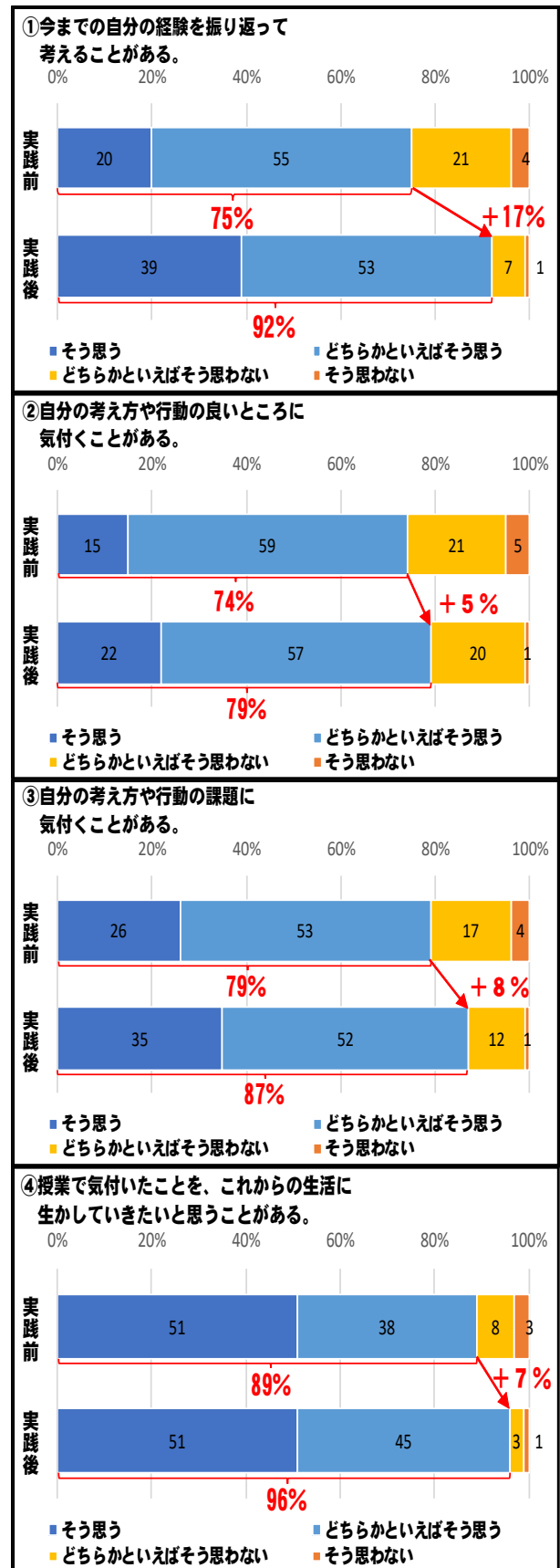


図7 道徳アンケートにおける生徒の意識の変容

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 生活経験や資料の問題場面と既存の道徳的価値を比べたことによって、分かっていないことや分かっているけれどできていないことに気付き、問題意識を持つことができた。
- 生徒が問題意識を持ちつつ、自分との関わりで道徳的価値についての理解を深め、問題に対する自分なりの解決策を考え、自己の成長を振り返ったことにより、自己を見つめ、よさや課題に気付き、これからの目標を見付けてよりよい生き方について考えることができた。

2 課題

- 問題を見付ける場面では、生徒の生活経験の差によって問題意識に違いがある。問題から生じる道徳的価値の理解を共有し、共通する道徳上の問題に気付かせるようにする必要がある。
- 解決策を考える際に、資料から離れられず、問題に対する自分なりの解決策を考えることができない生徒がいた。問題意識を想起させる発問の工夫や授業中の見取りの重視などにより、多様な考えを引き出せるようにする必要がある。

Ⅷ 提言

導入において、生活経験や資料の問題場面と道徳的価値の間のズレに気付かせることで、生徒は問題意識を持つことができる。また、問題に対する「解決したい」という切実感を高めることで、自分事として主体的に考えることができる。そして、問題意識を持ち続け、問題の解決に結び付く道徳的価値について考えることができる授業を展開することによって、自分なりの納得解を見いだすことができると考える。

<参考文献>

- ・文部科学省 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』(2017)
- ・佐藤 孝幸 著 『自己の生き方と結び付け道徳的価値の自覚を深めさせながら、道徳的実践意欲を育む指導の一試み ―第2学年道徳の時間に問題解決的な学習過程を取り入れた、少人数学級における指導を通して―』 宮城県教育研修センター(2012)

<担当指導主事>

内田 敬久 長沼 祐子